

ジャガイモの害虫 駆除へ一歩

北大チーム、英科学誌に発表

だまして餓死物質合成

ジャガイモの収量を激減させ、完全な駆除も難しいとされる害虫「ジャガイモシストセンチュウ」。この害虫を「だまして餓死させる」駆除法の開発につながる可能性を持つ物質の人工合成に、北大の研究チームが世界で初めて成功した。23日付の英科学誌「ネイチャー・ケミストリー（電子版）」で発表した。

ジャガイモシストセンチュウは1972年に道内に侵入。じわじわと増え、道によると今年3月現在、44市町村で確認されている。

この害虫は、根からジャガイモの養分を吸って成長。ジャガイモの収量が半分に減ることもある。また、この害虫が発生す

ると、種イモ農家は国に認定を取り消されるため、農家にとっては深刻だ。

農薬が効きにくい上、卵は10年以上も土の中で保存されるた



ジャガイモの根についた害虫の卵の殻。一つの殻に数百個の卵が包まれている。北海道農業研究センター提供

め、輪作で数年間違う作物をつくってしのいでも、再びジャガイモを植えると卵が孵化して害虫が増える。いったん発生すると完全に駆除できない。

この害虫の卵は、ジャガイモの根からごく微量に分泌される特有の物質に反応して孵化することが知られている。そこで、北大理学部の谷野圭持教授（有機合成化学）らは、構造が複雑で合成が難しいとされてきたこの特有の物質の人工合成に挑み、8年がかりで成功した。

人工的につくったこの物質を畑にまけば、ジャガイモが植えられたと「勘違い」して卵は孵化する。だが、実際にはジャガイモが植えられていないため、害虫は餓死する――。谷野教授は「実用化には、この物質を安価に大量生産する必要がある」としており、北海道農業研究センターとともに研究を重ねるといふ。

（小林舞子）